

《書評》

森岡優紀著 京都大学学術出版会

『中国近代小説の成立と写実』

(神戸市外国語大学) 津守 陽

本書は中国における小説の近代化を、「写実」の側面、すなわち小説がいかにして「社会の現実」を映し出すのかという問題から考察するものである。近現代中国における「写実」の追求について本書は、「社会の現実」を小説の中に映すことで社会変革の方向性を示す、知識人の近代化意識の表れとして捉えようとする。序章で「『写実』は極めて政治的な行為でもあった」と強調する通り、著者の姿勢は一貫して政治性とイデオロギー性に重きを置いて「写実」を理解しようとするものである。本書は二部構成からなり、第一部「写実をめぐる言説の形成と変遷」（第一章～第三章）では中国知識人による「写実」受容の過程を描き出す。第二部「翻訳からつくられる写実小説のかたち」（第四章～第七章および附）では、魯迅の翻訳と創作から「狂人日記」成立までの道筋を探る。

以下、一部と二部に分けて内容を概観したい。第一部の第一章「伝統的小説観の転換と日本政治小説の翻訳」では、小説による啓蒙を重視した梁啓超らの翻訳文体が検討され、原文の意を汲む名訳だが堅苦しい文体の『佳人奇遇』も、改変が施されているが民衆教化に適した文体の『経国美談』も、同様に小説のイデオロギー性を自覚しているという点において近代性への自覚を促したとする。第二章「自然主義・写実主義から現実主義へ」では「写実」をめぐる理論を、陳独秀や胡適による小説論、西洋の文芸理論書翻訳、茅盾の文芸理論書、胡風の社会主義リアリズム論の順で辿る。胡風の典型論は「写実」の理論的到達点でもあったが、同時に現実を「反映」しているか否かが文学の評価基準となる素地をつくり、文芸創作を縛る呪縛ともなった。第三章「アンチ・リアリズム

としてのポストモダン」では、馬原のメタフィクションの手法が、リアリズムの反映論を解体することで、イデオロギーの再生産への負担から降りたのだ、と指摘する陳曉明らの議論を紹介する。

第二部は主に魯迅の翻訳について、小説の「形式」に重点を置いて検討する。第四章「物語と啓蒙——明治期科学小説の重訳」で『月界旅行』『地底旅行』を取り上げ、これが決していい加減な意識ではなく、小説の構成や具象性を意識した改良であるとする。第五章「叙述と啓蒙——『スパルタの魂』と明治期の雑誌記事」では、拒俄事件を背景にした翻案『スパルタの魂』が、愛国主義を背景とする日本の武士道精神論が屈折を伴って中国へと思想連鎖する様（山室信一『日露戦争の世紀』）を物語っているとする。第六章「小説の遠近法——『域外小説集』」では、『域外小説集』の「魏晉風」古文による直訳も、「限制叙事」で書かれたアンドレーエフ作品への関心も、魯迅が「語り」など西欧小説の近代的形式に着目していたためであったとする。第七章「再現される「現実」——文言小説「懷旧」」では、「懷旧」の視点が「限制法」を取ることで小説世界のリアリティを作り上げ、伝統批判を語りに潜り込ませたと指摘する。ここから、梁啓超らが実現できなかった小説による啓蒙を、魯迅が完成させたと結論づける。最後に附「小説の正統性への自覚——周作人の初期翻訳の軌跡」では、周作人の初期翻訳が欧化要素を含む文言から典雅な古文へと移ったことから、『域外小説集』の頃の周氏兄弟が小説に「正統性」を加えようとした、と述べる。

ここで本書の意義を考えてみたい。著者は2016年6月に京都大学で博士学位を取得している。ウェブ上で公開されている要旨と審査結果によれば、博士論文は本書の第一章と第四章～第七章を「第二部」とし、前に「第一部」として清末の「近代的伝記」成立に関する議論を加えたものと見受けられる（論文本体は公開前のため未見）。本書

で導かれた、魯迅だけが完璧な近代小説を書き得た理由が、ただ一人近代小説の「形式」に自覚的であったことにある、という結論は博士論文でも保たれている。審査でも評価されている通り、この結論は小説の内容面に偏りがちであった従来の文学史的認識に一石を投じ、小説の近代化と形式との関係に光を当てたと言える。

また本書に特徴的なのは、徹底した資料・材源調査と、詳細な訳文の検討である。これにより著者は、例えば『スパルタの魂』の材源として明治期の少年雑誌の史伝物語を発掘し、また魯迅がヴェルヌの日本語版にどのように手を加え、小説を面白くするための工夫を施したかを明らかにするなど、清末民初の文学状況に対する理解を深めることに貢献している。

一方で本書には問題点も多い。以下4点に分けて述べたい。第一に、慎重な扱いを要する重要概念について、文中での検討が不足していると思われる。本書のキーワードとなる「写実」を著者は簡単に「社会を映す」と定義するが、そもそも何を満たせば小説は「社会を映した」ことになるのか。そこに時代や論者ごとの認識のゆらぎは無いのだろうか。また啓蒙意識の存在こそが写実文学の特徴であると言い切るが、それにしては「写実」をめぐる当時の議論と創作実践とを分析する緻密な論述が不足している。さらにすでに指摘のあるように、近代小説は近代以前の「小説」が自然に地位向上して正統性を獲得したものではない（齋藤希史「近代文学観念形成期における梁啓超」）。この点において、文言の短文を集めた「四庫提要」子部小説家類と、日本の政治小説を念頭に置いた康有為「日本書目志識語」「本館附印説部縁起」とを同一線上に並べて、「小説」観の変遷の脈絡を「啓蒙意識」に関わる単線で描き出そうとする本書冒頭の議論は物足りない。本書の問題意識に鑑みれば、まずは「文学」「小説」「形式」に起きたパラダイムシフトを検討しない限り、本書の立

ち位置はほやけたままである。

第二に、文芸の「近代化」に関する認識が単線的な進歩史観に偏りすぎているように思われる。本書の筋書きは、小説の近代性への認識が欠けていた当時において、魯迅だけが語りの形式に気づいた、というものである。だがこれは、周知の通り陳平原『中国小説叙事模式的転変』や王德威「沒有晚清，何來五四」の議論を嚆矢として、清末の多様な文学状況と「近代性」の複数性に注目が集まっている昨今の研究状況を、あまりにも無視してはいないだろうか。陳平原や齋藤希史の論文は再三注に挙がっているものの、清末民初における文学の近代化を、できるだけ複数潮流の衝突や往還の中に見出そうとするこれらの既存研究に対して、著者がどのような対話を築こうとしているのかが、本書からは見えてこない。この点、張麗華『現代中国『短篇小説』的興起』（2011年）は本書と共通する『域外小説集』や「懷旧」の分析を通して、「形式」と「近代性」の萌芽との関係を緻密に論じており、参考になると思われる。

第三に、根拠の薄弱な価値判断や論理の自己矛盾が見られる。魯迅の「狂人日記」が他を「圧倒」する近代性を示したと述べるが、その根拠は示されない。他にも「見事な名訳」「洗練された古文」などの評価が散見されるが、同様に詳細な分析を欠く。もし「形式」にこだわるならば、本文中で物語内容を検討している紙幅を、もっとこれらの「文体」の検討に割くべきではないだろうか。また同時期の訳でありながら、ヴェルヌの訳を「魯迅の翻訳はある意味ですでに写實的」と評価する一方で、『スパルタの魂』を「啓蒙の思想はまだ小説の写実性と結びよりついておらず、過渡期的な作品」とであるとするなど、自己矛盾する箇所も少なくない。

第四に技術的な問題を挙げる。手法上で気になったのは、『域外小説集』の文体検討においてドイツ語底本との比較を欠くことである。現代中

国語訳に基づいた著者の日本語訳と魯迅訳とを比べるのみでは、魯迅の「訳文」を検討したことにはならないだろう。事実、本書における『域外小説集』分析は小説の「語り」に集中しているが、ロシア語原文やドイツ語底本ではどうなっているのかという言及が無いため、魯迅が語りの「焦点」にどれほど「自覚的」であったのかがわからない。せめてドイツ語底本にあたっている谷行博の先行研究等を参考に詳述すべきであろう。またそれ以上に問題なのは、全編を通して膨大な誤字脱字や日本語表現の不備、および中国語語彙の混在が見受けられることである。「儀勇隊」(p.144, 河川は評者、以下同)など単純なタイプミスはまだしも、「直裁なかたちで」(p.26)「斬新的な民主化」(p.31)は仮にも文学を論じる研究書としていただけない。表現の不備により肝心なところで論旨が通らない箇所も少なくない。「魯迅の『スバルタの魂』にはこれらのギリシア史に詳述され

ていない書かれている幾つかの逸話がある」(p.154)、「この小説世界が現実と等価であるという前提は、胡風の『阿Q正伝』を例にして論じた『典型論』などの三十年代の社会主義リアリズム文芸理論の受容として基礎的部分を構成していった」(p.86)といった箇所は、校正の甘さのせいで文意が理解しにくい。また「限制叙事」「深度性」「先声的」などの中国語語彙が断りなく混入しているのも避けるべきであろう。

総じて言えば、校正の粗忽さから言っても、また実質「近代小説」と言いながら魯迅だけを論じているという点から言っても、やや拙速に出版されたという印象を与えるのが正直なところである。「形式」に重点を置く視座や、史実と虚構の関係への関心は興味深いだけに、著者の今後の進展に期待したい。

(2012年11月刊, 288ページ, 本体3,800円+税)

◆研究会員制度のご案内◆

当研究所は、中国研究者および広く中国に関心のある方々の参加と交流を目的とした個人向けの研究会員制度を設けております。中国研究所の趣旨をご理解の上、ご入会をご検討いただけると幸いです。

【年会費】 一般会員 9,600 円 学生会員 5,000 円

【会員特典】

- ・『中国研究月報』の無料配布(月 1 部)
- ・附属図書館の閲覧料無料
- ・中国研究所主催の研究会などのご案内・参加料割引(無料招待もあり)
- ・中国研究所発行物の割引購入

当研究所刊行の出版物(『中国年鑑』など)を、定価より 1 割引にて提供いたします。そのほか、詳細はお問合せください。

一般社団法人中国研究所

〒112-0012 東京都文京区大塚 6-22-18 電話:03(3947)8029 FAX:03(3947)8039

E-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp URL: <http://www.chuken1946.or.jp/>